

1. 2. 日本文化の骨子となっている仏教の中で最も重要な位置を占めている僧服について、歴史的、形態的に体系づけて研究を進めていきたい。ここでは文献による歴史的見地から始める。

3. 先ず初期仏教はインドに発祥し途中西域仏教に変化し中国及び朝鮮を経て、奈良朝時代の6世紀に初めて我国に渡来した。それと同時に僧侶の服装も導入されてきた。時代を区分すると伝来当初の初期、南都六宗時代の第2期、平安朝の第3期、鎌倉から江戸時代迄の第4期、明治以降の第5期に分けられる。初期の僧服は帰化人の僧の影響で全く中国風で色彩、形も質素であったが、第2期の奈良仏教の最盛期に入ると宗派も増え僧の権力獲得から一層美化されてきた。一方日本人独自の文化をつくりあげた第3期では仏教が国家と結び発展するにつれて色彩も神道性を帯びてくる。つづいて第4期に入ると新宗派の分裂、発生に伴い庶民服に類似するものから檀徒制度の移行により、次第に儀式化されたものと簡素化されたものへとはっきりけじめをつけるようになった。明治維新の際の神仏分離をなされてから今日迄各宗派では個々に従来の服制を定めている。初めは純粋な肉体保護の必要性から宗団の表徴へそして更に装飾的になっていく過程には必然性として政治的背景が存在している点など他の服装と共通しているところに興味深いものがある。